

# コロンタイの恋愛論の中国への紹介をめぐる

秋 山 洋 子

## I はじめに

アレクサンドラ・コロンタイ（1872-1952）は、ロシア社会主義革命におけるもっとも有名な女性革命家である。帝制下での地主で軍人である豊かな家庭に生まれ、結婚して息子を産むが、マルクス主義労働運動に身を投じ、スイス、フランス、ドイツなどで革命運動に参加した。とりわけマルクス主義の立場から女性解放運動に力をいれた。1917年にロシア革命が成功すると、帰国して国家保護人民委員（社会福祉担当大臣にあたる）に就任し、男女平等、婚外子差別の撤廃、産前産後休暇の制度化と母親への手当支給など、ソ連の女性政策の基本枠を作った。1921年の第10回党大会では、党の新経済政策（NEP）に批判的な立場に立つ「労働者反対派」を率いて、レーニンを中心とする多数派と論争した。その後、1922年に外交官としてノルウェーに赴任、正式の国交樹立で「世界最初の女性大使」となった。まもなくソ連国内ではスターリンによる粛清が始まるが、早い時期に国内政治から外交に転じたコロンタイはその渦中に巻き込まれることなく、戦中戦後を通じて党员としての地位を保ち、80歳の長寿を全うした。

コロンタイには、『社会と母性』（1916）、『経済の発展における女性労働』（1923）など、マルクス主義の観点から女性問題を論じた著作がある。それとならんで、「恋愛三部作」と呼ばれる小説群と、社会主義建設の過渡期における恋愛や性道德について書いたいくつかの評論がある。コロンタイの著作の中でも、性と愛をめぐるこれらの著作は、1920年代末、世界各地で紹介され、論争を巻き起こした。

本稿では、1920年代後半に日本に紹介されたコロンタイの著作が、日本語からの重訳として中国に紹介された経緯をたどり、中国におけるコロンタイ受容の様相を分析紹介するものである。

## Ⅱ 日本におけるコロンタイの衝撃

コロンタイの日本への紹介をめぐる状況については、以前に論文『『赤い恋』の衝撃——コロンタイの受容と誤解』として発表しているの、ここでは本論の展開に必要な程度に要点だけをまとめておく<sup>1)</sup>。

日本に最初に紹介されたコロンタイの著作は、1927年11月に出版された松尾四郎訳『赤い恋』(世界社)<sup>2)</sup>であった。この小説の原題はヒロインの名をとった『ワシリッサ・マルイギナ』であり、『三代の恋』、『姉妹』とともに『働き蜂の恋』という書名で1923年モスクワで刊行された。この3編は、のちにコロンタイの「恋愛三部作」と呼ばれるようになる。『赤い恋』という衝撃的な題名は、1927年アメリカで出版された *Red Love*<sup>3)</sup> のタイトルを直訳したものである。コロンタイは1926年から27年にかけてメキシコ大使として派遣され、その間にアメリカも訪問している。英訳の出版はこれを機会に行われたもので、1927年3月10日付けの著者による序文が付されている。松尾四郎訳は、この英語版からの重訳で、序文もそのまま翻訳されている。

『赤い恋』は発売5ヵ月後には10版、さらに2ヵ月後には15版というベストセラーになった。この小説がベストセラーになったのは、「赤い恋！それは赤露の新社会に燃えつゝある性欲と恋愛のルツボの炎だ。(中略) 見よ！本書の主人公ワツシリツサ女史の性的に解放された姿容を！」という新聞広告の宣伝文<sup>4)</sup> が如実に示すように、革命ロシアの性事情に対する覗き見的な興味によるものだった。センセーショナルなタイトルと宣伝によって、『赤い恋』はベストセラーになり、これを手にすることは流行の先端を行く若者たちの風俗とさえなった<sup>5)</sup>。

しかし、実際にはこの小説は題名が連想させるものとはかなり違って、ロシア革命建設初期の新経済政策(NEP)時代を背景にした女性の成長小説である。織物工場労働者で共産党の活動家であるワシリッサは、女性の権利を守り、福祉を向上させるために献身的に働いている。しかし、彼女の恋人は、新経済政策で工場長の地位に就くと革命への情熱を忘れ、若い娘に心移す。ワシリッサは悩んだ末、恋愛よりも仕事を選び、生まれてくる子供は保育所を作って仲間と共に育てようと決意する。ヒロインのワシリッサは、いきいきとした感受性豊かな女性として形象されている。

このようなヒロインを、同じように恋愛や仕事について悩んでいた同時代の日本の女性たちは、共感をもって受け入れた。例えば神近市子はワシリッサを「私共が

当時の最も健康な婦人として考へてゐる婦人」<sup>6)</sup>とし、平林たい子は「ワツシリツサ女史に会つて、力強い指示を受けた」<sup>7)</sup>と書いている。

これに対して男性評論家は、ワシリッサが恋愛と革命の板ばさみに悩んだあげく革命＝仕事を選ぶという結末に興味を示し、「恋愛の微小化」<sup>8)</sup>「(革命への)忠義のイデオロギー」<sup>9)</sup>といったさまざまな解釈をした。こういう議論の中で、神近市子が、女性に社会活動への道を開くことで恋愛受難から立ち直らせようというコロンタイの示す方向に共感しながらも、ここに描かれたロシア共産党における女性の位置が今なお低いことをきちんと指摘していることは注目に値する<sup>10)</sup>。

『赤い恋』について、1928年4月には、林房雄訳『恋愛の道』(世界社)が出版された。これは、「恋愛三部作」のうち残る2作、『三代の恋』と『姉妹』を収録したもの<sup>11)</sup>。

この『三代の恋』こそは、コロンタイの小説の中で論争の焦点となった作品である。『三代の恋』は、文字通り祖母・母・娘三代の異なる恋愛観とその実践を描いている。帝制時代の自由主義的知識人である「祖母」は、近代的恋愛の信奉者で、厳密な一夫一婦しか認めない。夫に愛人ができれば、きっぱりと手を切る潔さだ。これに対して地下革命活動にたずさわってきた「母」は、活動の中で結ばれた同志である夫と、思想的には相容れないが「官能的」に結びついた恋人との間で、どちらか一人を選ぶことができず苦悩する。革命の渦中に生きる「娘」のゲニア<sup>12)</sup>は、固定的な性関係にこだわらない。恋愛とは時間とエネルギーのかかるもので、革命活動が忙しい自分たちには恋愛している余裕がない。けれども性の欲求はあるので、気に入った相手とその場かぎりの関係をもつ。その相手には、「母」の愛人も含まれているが、べつに母から奪ったとは思っていない。妊娠しても相手が誰だかわからないし、育てる余裕もないとあっさり中絶することを選ぶ。

この小説に登場する三代目のゲニアは、たしかに従来のモラルに挑戦する革命時代の落とし子である。革命の時代に生きる自分たちには恋愛のように手間ひまのかかることをしている余裕はないという彼女は、女だけに課された貞操や母性という規範を軽々と乗り越えている。

『三代の恋』の物語は、そんな娘が理解できずに混乱した「母」が、語り手のところに相談にきたという形で展開される。語り手は、「母」と同世代の革命活動家で、コロンタイ自身を連想させる。彼女はゲニアの話を聞いて肯定するでも否定するでもなく、後姿を見送って「これからの真理はどちらにあるのか」と自問自答するところで小説は終わる。

『赤い恋』には共感を示した日本の女性たちも、女性に課されてきた規範をあまりにも軽々と乗り越えたゲニアの前ではたじろいだ。ちょうど1928年に創刊された『女人芸術』<sup>13)</sup> 創刊号は、6月に開催された『恋愛の道』の知名婦人合評会の紹介記事を載せている。「現ロシア最左派たる娘の多角恋愛」に対して、山田わか子（原文のママ）は「退歩です」と断言し、平林たい子や神近市子は「大事の前の小事」、すなわち革命社会が落ち着くまでの過渡期の現象とかなり苦しい言い訳をしている。その中で、吉屋信子がひとり、罪悪観念がなくて明るくのびのびした若い世代の恋愛をうらやましいと冗談めかして語っているのが印象的だ<sup>14)</sup>。

### Ⅲ コロンタイの恋愛論をめぐる論争

小説の翻訳紹介に続いて、同じ1928年9月には、コロンタイの恋愛論を日本独自に編集した論文集『恋愛と新道徳』（世界社）が出版された。これは『恋愛の道』と同じく林房雄訳となっているが、収録された論文の原語はドイツ語・ロシア語・英語とさまざまで、訳者も林を含め3人である<sup>15)</sup>。コロンタイブームに乗って急遽編集されたと思われる論文集であるが、恋愛・性・家族に関するコロンタイの代表的な論が手際よくまとめられている。

林房雄は『恋愛と新道徳』の出版に先立って、『中央公論』1928年7月号に「新『恋愛の道』——コロンタイ夫人の恋愛観」を掲載し、コロンタイの恋愛観について解説した。後に転向し、戦後は「大東亜戦争肯定論」などを展開する林だが、当時はプロレタリア作家の代表として華々しく活躍していた。林は、『三代の恋』のゲニアの行動の説明として、「恋愛と新道徳」の中でコロンタイが主張する「恋愛遊戯」論を次のように紹介する。

「恋愛遊戯」とは、コロンタイがドイツの女性作家ハイスの理論を借りたもので、真の恋愛に到る前段階としての、友愛を基盤にした自由な性関係を指している。コロンタイ＝ハイスにとって、現在の男女の関係のうち、①正式合法的な婚姻は、私有財産にのっとった排他的なものであり、②売春は、女性を蹂躪し両性の精神に悪影響を及ぼす。したがって、③自由恋愛が望ましいが、真の恋愛を達成するにはさまざまな障害がある。そこで、真の恋愛に達する過程として「恋愛遊戯」が提唱される。林は、ゲニアと男たちとの関係は革命という過渡期の社会を背景にした「恋愛遊戯」だと解釈する。さらに林は、コロンタイの恋愛観の重要なポイントは、「恋愛私事」説だとして、『赤い恋』の原著者序文を引用する。そこではコロンタイは、性

生活は人間の私事であり、ある個人の真価は家庭道德上の行為によって価値づけられるべきではなくて、その仕事、才能、意志、および国家社会における有用性によって決められるべきだと主張している。

そして林は、現在はこれまでの歴史にない自立した労働女性が登場した時代であるとして、「現代の婦人は——自らの能力によって労働しつつある婦人は——すでに、恋愛の分野に於てもまた、男子によつて演ぜられる悲劇又は喜劇の単なるわき役であることを止めた。今や彼女は、彼女自ら演じなければならぬ新しい精神悲劇の勇敢な主人公である」と、結論を女性たちに委ねている。

林によって紹介されたコロンタイの恋愛論に対して、日本ではさまざまな立場から論争がおこなわれた。女性の側から出た代表的な批判のひとつが、高群逸枝の「官僚的恋愛論を排す——コロンタイ夫人の恋愛論」(『中央公論』28年8月号)である。のちに日本女性史の研究で名を残す高群は、当時は新進の詩人でありアナーキズムの立場に立っていた。マルクス主義者によるソ連政権を官僚支配とみる高群は、恋愛が私事だとするのは公を高く私を低く位置づける官僚思想であり、ゲニアの恋愛観は権力を持つ男性の恋愛観と変わらないと批判した。公事と私事の分離と優劣付けに対する高群の批判は、女性が男性並みに社会進出することで女性に対する二重道德規範の解消をめざすというコロンタイの指向が含む問題点を指摘している点では正論である。しかし、高群の文章は全体としては散漫で、論旨がすっきりせず、ソ連の高官であるコロンタイへの反感が先立っている印象を受ける。

無政府主義の立場からの高群の批判とは逆に、マルクス主義の立場からもコロンタイ批判が行われた。その代表的な論者は山川菊栄であった。

山川は『改造』1928年9月号の「婦人界見たまゝ」の1項目として「コロンタイの恋愛観」を書いている。山川は早い時期にコロンタイを日本に紹介した一人であるが<sup>16)</sup>、コロンタイの恋愛観に対しては批判的な立場に立っている。山川は、『赤い恋』のワシリッサについては、男性中心の両性関係が破綻したところから出発する新しい女性像として評価するが、『三代の恋』のゲニアは、飢饉のときに人々が土くれや雑草を食べるのと同じように過渡期の混乱の中で変則的な解決を求めたに過ぎないと批判する。そして、旧社会では性に関して男性には無制限な自由が許され、女性には絶対的な束縛が課されていたが、新しい女性は旧社会の男性を真似るのではなく、過去よりはるかに高い道德的基準を打ち立てるべきだと結んでいる。さらに、『婦人公論』1929年1月号に掲載された「今日の恋愛をどう見る？」では、コロンタイの主張は恋愛と性欲とを分離して、人格的交渉の伴わぬ性欲衝動の満足が現

代の女性の取るべき唯一の道だとしていると断定したうえで、エンゲルスを引いて独占的な恋愛を擁護し、性的放縦は小ブルジョアの遺産だというレーニンのことばで締めくくる。マルクス主義の優等生である山川らしい隙のない論の運びだが、ゲニアの恋愛観＝コロンタイの恋愛観として全否定する態度には、コロンタイの主張をじっくり検討するよりは、青年層への悪影響を食い止めようという政治的な意図が強く働いているようにみえる。この論文のタイトルが単行本所収にあたって「コロンタイの誤謬」<sup>17)</sup>と改められたのもそのことの反映であろう。

山川のコロンタイ批判の背後には、クララ・ツェトキンによってまとめられたレーニンの女性問題に関する談話がある<sup>18)</sup>。レーニンは、1920年にドイツ社会民主党の指導者クララ・ツェトキンと交わした会話の中で、当時の青年の間で流行していた性的衝動と恋愛要求の満足は一杯の水を飲むように簡単なことだという理論を批判し、このような無節操はブルジョア社会の悪影響で、革命とはかかわりないと断言する。レーニンの談話は『三代の恋』が発表される以前のもので、コロンタイを名指しで批判しているわけではない。しかし、この談話が発表されて以来、コロンタイは「水一杯主義」のレッテルを貼られ、「コロンタイズム」は青年の性的放縦を容認する主義として正統派マルクス主義者から批判されることになった。

コロンタイの仕事としては本筋である女性と生産労働／再生産労働についての考察は、1930年に大竹博吉訳で『婦人労働革命』、1931年に尾瀬敬止訳で『母性と社会』が出版された。こちらの訳者はどちらもロシア語の専門家である。しかしこのころには、日本のコロンタイブームは下火になりつつあった。

#### Ⅳ 日本から中国へ——《新女性》のコロンタイ特集

日本語に翻訳されたコロンタイの作品は、間髪をおかずというべき早さで中国語に重訳されて紹介された。

1928年、上海の開明書店が発行している雑誌《新女性》33号（第3巻第9期）は、コロンタイの特集号として編集された。この特集は、日本語から翻訳された『三代の恋』（芝蔵訳）および、林房雄の「新『恋愛の道』——コロンタイ夫人の恋愛観」（黙之訳）、高群逸枝の「官僚的恋愛論を排す——コロンタイ夫人の恋愛論」（芳子訳）の二論文からなっており、巻頭には、「新恋愛問題」と題された編者の序文がおかれている。

編者序文は、コロンタイ紹介の意図を次のように述べている。

恋愛の思想については、ほかの思想とまったく同じように、永遠に変動の中にあり、常に新しい発展があるものだ。本誌では最近恋愛か非恋愛かという問題で、にぎやかな論争が行われた。本号では、われわれはさらに新しいロシアの新しい恋愛思想を紹介し、赤化したロシアの青年男女の、恋愛の赤化はどこまで行きついたかをお知らせしよう。

(中略) これら数編の文章を発表するのは、なにも鼓吹宣伝するためではなく、完全に客観的な立場に立って、現代の恋愛に関する思想の変転の状況を知っていただくためである。(p.985) <sup>19)</sup>

さらに編者は、この問題について中国の思想界の反応を知りたいので読後感を寄せてほしい、追って特集号を発行すると読者に呼びかけている。

この特集が掲載された雑誌《新女性》は、1926年に創刊された。編集長は、それまで商務印書館で《婦女雑誌》の編集長をしていた章錫琛である。《婦女雑誌》は1915年から1931年まで発行された中国でも大きな影響を持つ女性雑誌で、章錫琛は1921年に同誌の編集を引き受け、従来の良妻賢母路線から、女性解放を目指す論壇へと雑誌の方向を大きく転換させた。しかし、1925年1月に「新性道德」特集号を出したことで商務印書館の保守的な経営者と衝突して編集長を辞任、1926年1月に《新女性》を創刊した。その後、雑誌だけでなく女性問題に関する書籍の出版も手がけるため開明書店を創設した。章を助けて《新女性》の編集や執筆にあたったのは、1922年に発足した婦女問題研究会の会員たちであった<sup>20)</sup>。コロンタイ特集の編者序文に署名はないが、章錫琛によるものと考えていいだろう。

編者序文にもあるように、この雑誌は性や恋愛の問題を大胆に取り上げている。序文で言及されている恋愛か非恋愛かの論争は、29号(第3巻第5期、1928年)に掲載された謙弟の「非恋愛と恋愛」をきっかけに始まったもので、コロンタイ特集号の前号には、「非恋愛論と非非恋愛論」というタイトルで、章錫琛、劍波、謙弟の誌上論争が組まれている。この論争の発端となった謙弟の非恋愛論は、性欲は生理的な欲求で心理とは無関係だとして恋愛そのものを否定している。章錫琛をはじめとする婦女研究会のメンバーは、儒教的旧道徳に抗して男女平等・自由恋愛を主張していたが、謙弟の論はさらに過激なものであった。そのような論議が交わされていた《新女性》は、コロンタイについて論じる場として、まったく違和感のないものだった。むしろ違和感のないぶん、コロンタイの及ぼした衝撃力も弱かったといえるかもしれない。

それにしても、日本で『恋愛の道』が発行されたのが1928年4月、林房雄論文、高群逸枝論文の『中央公論』掲載が7月、8月号である。日本の雑誌が実際は表題の月より早く発行されたにしても、『新女性』9期に特集が組まれた素早さは感嘆に値する。

## V 《新女性》の「新恋愛問題」特集

《新女性》36号（第3巻第12期，1928年）には，編者の予告どおり「新恋愛問題」特集が生まれ，16本の文章が一举掲載された。その題名と著者は以下の通り，〔 〕内の姓名は筆者が補足したものである<sup>21)</sup>。

1. 性愛とその将来の転変を論ず 剣波〔盧剣波〕
2. 「三代の恋」に関する分析観察 姚方仁〔姚蓬子〕
3. 「三代の恋」「新恋愛の道」「官僚的恋愛観を排す」の三文を読んで 文宙〔倪文宙〕
4. 恋愛の現在と将来 朱梅
5. 「三代の恋」読後感 章克標
6. 「自由性交」と「恋愛遊戯」 洪鈞
7. 恋愛至上感の抹殺 静遠
8. 相対性原理によって新女性9月号が求める新恋愛問題への解答に応ず 安之 付・コロンタイの恋愛観 山川菊栄
9. われわれも自分自身の三代の恋を持つだろう 伏園〔孫伏園〕
10. 三代の恋の二人の対話 孫福熙
11. 個性本位の恋愛 陳醉雲
12. 「新恋愛の道」を読んで 毛尹若〔毛一波〕
13. 新恋愛問題 弋靈
14. 三代の恋を読んで 波弟
15. 新恋愛問題私見 龍実秀
16. 新恋愛問題への解答 蒲察



これらの文章は長さが1ページから16ページとさまざまであり、厳密な論というよりは気軽な感想に近いものが多い。その中に見られる特徴をいくつか紹介してみよう。

巻頭にある剣波の論文は、16ページといちばん長く、総論的な性格をもっている。剣波はまず、《新女性》ではこれまでも恋愛についての論議がくりかえされ、その中で「自由性交」論や「非恋愛」論が提起されてきたとして、コロンタイによる「恋愛遊戯」がそれほど過激な主張ではないというところから出発する。剣波自身も同年7期に発表した「性愛と友誼」の中で、性交の自由、すなわち性愛と性交を分離し、自由意志のみにもとづく束縛のない性の自由を主張した。

「性愛とその将来の転変を論ず」の中でも、剣波は同じ主張をする。

性交が自由になり、貞操が減れば、愛は母子の愛、兄弟愛と同じようになる、これは人と人との間の感情を一筋の水平線で区切れないことからくる自然の結果だ。いわゆる「恋愛」も「性愛」の比較的遥かで長い程度をいうにすぎず、貞操を独占する意味は含まない。——将来の自由な社会において、性の自由とて問題になりうるだろうか？  
(p.1357)

このような立場に立つ剣波であれば、第三代のゲニアの行動に対してもとりたてて批判があるわけではない。近代資本主義制度が生んだ新しい女性の自由な選択を見守ろうと、林房雄の結びの言葉を繰り返すにとどまっている。

ところで、この盧剣波（1904－1991）は、中国におけるアナーキストとして知られた人物である。五四時代にアナーキズム思想に目覚め、主として出版活動による宣伝に従事し、1926年からは上海で雑誌《民鋒》を発行していた。《新女性》の筆者の中では、盧剣波のほかにも、「非恋愛」論の主張者である謙弟（張履謙）、この特集に名を連ねている尹若（毛一波）などが、アナーキストとして《民鋒》出版にかかわっていた。《民鋒》は1928年国民党によって発禁にされているので、コロンタイ特集への執筆はその事件と前後した時期になる。

当時の上海は、1927年4月の蒋介石による反共クーデター以来、国民党の独裁支配による緊張下にあり、とりわけ共産党は地下活動を余儀なくされる厳しい状況にあった。アナーキストの中には共産党に対抗するため国民党と手を結ぶグループもあったが、《民鋒》グループは国民党批判の論陣を張って妥協しなかったため弾圧にあった<sup>22)</sup>。《新女性》の関係者には共産黨員も少なくなかったが、アナーキストでも

盧劍波らとは共存できると認めていたのだろう。この点は、日本でアナーキストを標榜していた高群逸枝が、共産党の幹部であるコロンタイへの敵愾心をむき出しにしていたのとは対比してみると興味深い。コロンタイはマルクス主義者であるが、その恋愛論はむしろアナーキストに受け入れられやすい面を持っていたし、それゆえにレーニンの言を金科玉条とする正統派マルクス主義者から批判されることになった。中国のアナーキストが彼女に共感を示したのも不思議ではない。

劍波の論でわかるように、《新女性》の執筆者の多くにとっては、恋愛の自由のみならず、「愛」と切り離された性の自由も許容範囲にあった。当時の中国の知識層の中でも、性の問題についてとりわけ急進的な人たちが寄って作った雑誌であるからには当然だといえる。したがって、日本で論争の媒体となった『中央公論』や『改造』が幅広い読者層を持つ総合雑誌であったのに比べると、《新女性》におけるコロンタイ・ショックは弱かったといえる。

他の論者たちも、性の自由を認めるべきだという点では、ほぼ一致している。ただ、その中でニュアンスの違いはあり、「性欲は食欲と同じで、満たしたいときに満たせばいいのだ」(蒲察, p.1425)という即物的な立場から、「人類には感情がある以上、自分が信じ慕う人との肉の結びつきを喜ぶものだ」(洪鈞, p.1379)という性と愛を切り離すことに抵抗を感じる立場までの幅がある。

性と感情は切り離せないとする洪鈞は、『三代の恋』のゲニアも誰とでも無差別に性関係をもっているわけではなく、実際は自分が気に入った相手を選んでいる。それを「真の恋愛」と無理に区別しようとしたことがゲニアの、そして作者であるコロンタイの混乱の原因だと分析している。洪鈞と同じように、コロンタイの恋愛観が観念的で矛盾しているとする批判は、文宙、弋靈など、他の論者にも見られる。

じっさい、コロンタイ自身の恋愛論は、霊肉一致した至高の愛というトルストイ的な恋愛観と、複数の相手や多様な相手に開かれた性の自由（それは男性には許されていたが女性にとってはタブーだった）の肯定との間にあって、理論的な矛盾や破綻を含んでいる。その矛盾や破綻が『赤い恋』のように著者の分身であるヒロインに反映されると、読者の女性たちの心に響くものになる。しかし、恋愛論だけをとってみれば、上記のような批判が出てくるのは無理のないことだ。

『三代の恋』のゲニアの主張と行動を、革命の変革期という時代背景によって解釈しようという点も、多くの論者に共通している(姚方仁、朱梅など)。そういう論者はまた、革命ロシアと現在の中国では、社会状況が違いすぎていっしょに論じても意味がないと考える。

「中国の恋愛思想は、五四以後急激な転換をしたとされている。しかし現在に至るまで大騒ぎをしたにもかかわらず、「祖母の時代」の恋愛観から逃れられない、あるいはその時代にも及ばないかもしれない！」(姚方仁, p.1369)。また、現在の中国は三代どころかさらに多層の新旧が並存しているが、いつか将来は「われわれも自分自身の三代の恋愛をもつことだろう」(伏園, p.1400)という述懐もある。

一方、少数ではあるが、「私はいわゆる「時代性」に好感を持たない」(陳醉雲, p.1407)、と過渡期の特殊性を認めない論者もいる。陳醉雲は、ゲニアの求めるような個人本位の自由な恋愛は、過渡期のものというよりは理想であり、むしろ将来結婚制度が廃止され、計画出産が実施され、児童の公育や老人の公養が実現された社会でこそ可能になるとする。

コロンタイへの反論としては、彼女の提案する「恋愛遊戯」という概念への疑問が最も多い。この概念そのものがドイツの作家からの借物で、コロンタイ自身も十分消化していないところがあるので、疑問が出るのも当然であろう。また、「遊戯」という語にとらわれて、人間としての交流を伴わない肉体だけの関係と誤解して批判する者もいる(朱梅など)。

コロンタイの批判者の中にも、高群逸枝の「官僚的恋愛論を排す」に共感する者はほとんどいない。たとえば孫福熙は、高群はコロンタイが大使になったことで官僚だと決め付けているが、恋愛私事論がなぜ官僚的なのか理解できないとして、高群を自分が理解できない新理論を無理やり抹殺しようとする小学教師タイプだと一蹴している。

じつは、この特集には、中国の筆者による16本の論考のほかに、山川菊栄による「コロンタイの恋愛観」が掲載されているのだが、8番の安之の文に含まれていて、目次に明示されていない。(この時期の中国の雑誌では、翻訳の出所ばかりか、翻訳だということさえ明示されないことがまれではなかった)。これはⅢで言及した『改造』1928年9月号に掲載された短文の翻訳である。山川菊栄の明快な批判は、日本マルクス主義者の立場を代表するものとして選ばれたのだろうか。

ところで、コロンタイの恋愛論に新しいものがあるとするれば、それは女性の立場から性の自由という問題を提起したところにある。日本では、高群逸枝や山川菊栄をはじめとして、神近市子、平林たい子など多くの女性たちがコロンタイの恋愛観について論じている。しかし、《新女性》は女性雑誌であるにもかかわらず、コロンタイ特集の筆者はほとんど男性だと思われる。筆名のすべてが特定できたわけではないが、特定できた中に女性は含まれていないし、女性としての立場を表明した発

言も見られない。《新女性》が基本的には男性知識人による女性の啓蒙を目指す雑誌だったことは、ここにもはっきりあらわれている。

その中で、孫福熙の「三代の恋の二人の対話」だけが、男女の対話という形式で女性の意見を紹介している。二人は親しい友人同士で、女性は上海で勉学中、週末に連れ立って近郊へ遊びに来たと設定されている。

「新女性を読んだ?」「三代の恋が載っていた号のこと?」で始まる会話では、男性はコロンタイの主張に全面的に賛成し、女性は賛成ではないという。女性は、愛情さえあれば他の条件は無視していいが、愛情のない性交は罪悪であり、親の強制による結婚や売春と変わらないとゲニアを批判する。ただ、批判しているのはゲニアの行動自体ではなく、ゲニアが恋愛を狭く定義することで、「気に入った」とか「親しく感じる」という感情を恋愛とは別物だと考えている点だ（この批判は、「真の恋愛」と「恋愛遊戯」を強いて区別しようとしたコロンタイの恋愛論に対する批判でもある）。そういう感情は愛情と同じことではないか、その感情を認め、自由に愛し合えばいいではないか、「このような絶対的に自由な男女の結びつきはきっといつか実現する、こっそり実行している人がどれだけいようがかまわないけど、少なくともあなたと私はこの幸せを味わいはじめたわ!」というのが彼女の結びの言葉である（p.1405）。

この意見が実際に女性の口からでたものかどうかはわからない。しかし、性は感情とは無関係とする「非恋愛論」がいかに観念的なのに比べて、自由と愛情の両者に価値をおく「彼女」の意見には、実感の裏打ちがあるように感じられる。

## VI 翻訳の競作とその反響

《新女性》の特集に続いて、コロンタイの著作の単行本も続々と出版された。まず、特集号の出た翌月、1928年10月に、沈端先訳の《恋愛之路》が発行される。作新書社発行、開明書店販売というこの本は、114ページの小冊子で、『三代の恋』、『姉妹』の2編に、付録として林房雄著黙之訳〈新恋愛道〉が収録されている。『三代の恋』の訳文は、《新女性》に掲載されたものと同じであり、このことから《新女性》の訳者芝蔵は沈端先のペンネームだとわかる。この本は同誌の特集に『姉妹』を付け加えて、急遽出版されたのだろう。

表1 日本におけるコロンタイの翻訳※

	年	月	訳者	書名	出版社	内容	
1	1927	11	松尾四郎	赤い戀	世界社		→中国語版2, 5
2	1928	4	林 房雄	戀愛の道	世界社	三代の戀/姉妹	→中国語版1, 3
3	1928	9	林 房雄	戀愛と新道德	世界社		→中国語版4
4	1930		中嶋幸子	偉大なる戀	世界社		
5	1930		内山賢次	姉妹	アルス社		
6	1930		林 房雄	姉妹	世界社		
7	1930		内山賢次	グレート・ラブ	アルス社		
8	1930		内山賢次	三代の戀	アルス社		
9	1930		林 房雄	三代の戀	世界社	2を改題	
10	1930		大竹博吉	婦人労働革命	内外社		
11	1931		尾瀬敬止	母性と社会	ロゴス書院		
12	1936		大竹博吉	新婦人論	内外社	10を改題	

表2 中国におけるコロンタイの翻訳

	年	月	著者	訳者	書名	出版社	内容
1	1928	10	柯倫泰	沈端先(夏衍)	戀愛之路	上海開明書店	三代的戀愛/姉妹 /付・新戀愛道(林 房雄・默之译)
2	1929	4	柯倫泰	溫生民	赤戀	上海啟智書局	付・譯序/原序
3	1929	4	柯倫泰女 士	溫生民	戀愛之道	啟智書局	譯序 三代之戀, 姉妹
4	1929	6	柯倫泰女 士	沈端先, 汪馥泉	戀愛與新道 德	北新書局	付・譯者の話
5	1929	7	柯倫泰夫 人	楊騷	赤戀	上海北新書局	付・重譯者序, 原 序
6	1930		柯倫泰	李蘭	偉大的戀愛	上海現代書局	偉大的戀愛, 姉 妹, 三代的戀愛
7	1930		柯倫泰	周起應(周揚)	偉大的戀愛	上海水沫書店	
8	1932		柯倫泰	方紀生	婦人與社会 制度	北平星雲堂書 店	
9	1934		柯倫泰夫 人	過立先	赤戀	開華書局	節譯

※ 文献は日中ともに、戦前のものに限った。また、日本語から中国語に翻訳された文献については、発行月も付記した。

のちに夏衍の筆名で中国を代表する劇作家となる沈端先は、1927年春に日本留学から帰国した。友人の会社に居候しながら共産党の地下活動をしていたところ、日本時代に面識のあった呉覺農<sup>23)</sup>と再会した。彼を通じて開明書店の夏丐尊や章錫琛

にも紹介され、勧められてペーベルの『婦人論』などの翻訳をするようになった。毎朝起きると2000字を訳すことを日課にし、残る時間は活動にあてたが、規則正しい仕事で翻訳料が入ったので、貧しい文芸界の仲間のなかでは「<sup>きんまんか</sup>万元戸」になったと回想している<sup>24)</sup>。《恋愛之路》の冒頭には〈訳者贅言〉として、コロンタイ（ここでは奥付の柯倫泰とちがって科倫泰という字を当てている）の略歴を紹介しているが、「本書の中の思想がどうかということについては、何も意見を付け加えず読者が自分で判断するに任せるのが最良だと考える」と、内容へのコメントは控えている。なお、林房雄論文を訳した黙之は開明書店の編集面を担当していた夏丐尊で、1900年代の東京高等師範留学生、片山潜など日本の社会主義文献を翻訳している<sup>25)</sup>。

翌1929年4月には温生民訳で《恋愛之道》と《赤恋》が啓智書局から出版された。訳者の温生民は両書の序文の中で、革命や仕事と恋愛についての中国の青年たちの悩みに触れているが、恋愛は社会の下部構造に規定されるので、ほんとうに恋愛を享受するためには、まず社会を変革しなければならない、と唯物史観で割り切っている。『三代の恋』のゲニアに対しては、過渡期の混乱と断定し、『赤い恋』のワシリッサに対しても、両性関係の檻を脱して社会人として自立した点を評価しているだけで、彼女の恋愛については触れていない。

さらに7月には、北新書局から楊騷訳で《赤恋》が出版される。これも松尾四郎からの重訳である。楊騷は「序」の中で、昨年末にこの本を翻訳しようとしたが、事情があって帰郷し、上海に戻ったときは他の人の翻訳がまもなく出版されると聞いてためらったが、友人の薦めもあって翻訳を決意したと述べている。版權についての意識がなかった当時は、同一書の訳本が数種出回ることは珍しくなかった。

楊騷は読者に対して、新しい女がどんなふうに接吻するかとか、新しい男女がどんなラブレターを書くかといったことが知りたければ、上海にいる浅薄なモダンガールに聞けばいいが、真に目覚めた女性が旧勢力や旧道徳といかに戦い、人類全体への義務に関心を持ってそれをいかに遂行するかを知りたければ、この本を買って読んでほしいと呼びかけている。楊騷は1920年代、女性作家黄白微との恋愛・結婚・離婚で上海文壇を騒がせた作家であるが、それだけにこの小説に対する共感も他の訳者に比べて高いように思われる。また、楊騷は《赤恋》に先立って、コロンタイを含む15人の女性革命家を紹介した森田有秋《世界革命婦女列伝》を翻訳しており（春潮書局、1929）、コロンタイの伝記については同書を参照するようにと序の中で述べている。

コロンタイの恋愛論については、1929年6月、林房雄編集の『恋愛と新道徳』を

そのまま翻訳した《恋愛与新道德》が、沈端先・汪馥泉合訳で北進書局から出版された<sup>26)</sup>。

1932年には、『偉大な恋』が、周起応（周揚）訳、水沫書店と、李蘭女士訳、現代書局で二種類出版されている。周揚は『アンナ・カレーニナ』をはじめロシア文学の翻訳を多く手がけているが日本語の訳書はないので、こちらはロシア語からの翻訳だと思われる。1932年には、『婦人と家族制度』（方紀生訳・星雲堂書店）が出版されている。このように、中国におけるコロンタイ紹介は、日本の後を追う形で短期集中的に行われた。

こうして紹介されたコロンタイは、中国ではどのように受け止められたのだろうか。1929年7月に雑誌《紅黒》に掲載された胡也頻の小説『M市へ』の冒頭には、こんな会話が交わされる場面がある。

夏克英女史が大声で言った：「……性の完全解放……」

もう一人の女史がこれに応じた：「そうよ、女だけが女に共感する」

何人かの男たちがこっそり言った：「ぼくらが打倒される時がきた」

夏克英は話を続けたが、女主人が入ってくるのをみると、立ち上がって彼女を引っぱり、たてつけにたずねた：「素裳、あなたはコロンタイの三代の恋愛をどう思う？ あなたの意見をぜひ聞きたいの」（中略）

素裳は笑いながら小声で言った：「私に聞いてどうするの？ あなたはとっくに実行してるじゃないの？ もしかしたらもう第四代のを——あなたにとってコロンタイの三代の恋愛は問題じゃないでしょう」

夏克英はおどけた顔をして軽い瞬きをすると、また言った：「あなたの天才的な口にはかなわない。でも、あなたに聞いたのはこの問題についての意見で、べつに個人のことで——」

素裳はしかたなく言った：「誰もがしたいようにすればいいでしょう。恋愛や性交についての観念は、一人の人間でさえしょっちゅう変わるものだわ。自分が正しいと思うようにするのが一番でしょう」<sup>27)</sup>

《紅黒》は沈從文、丁玲、胡也頻らが発行していた雑誌で、『M市へ』には丁玲による「『M市へ』紹介」が付されている。丁玲は1927年に《小説月報》に《夢珂》を発表して小説家としてデビュー、1929年の短編集『暗黒の中で』では近代都市を背景に自立を求めて暗中模索する同時代の女性像を描いて注目された。コロンタイ特

集を組んだ《新女性》の巻末には、開明書店から出版された『暗黒の中で』の全ページ大の広告が掲載されている。夫である胡也頻の小説も、単行本の『モスクワへ』という題名が示唆するように、富にも美貌にも教養にも恵まれたヒロイン素裳が、それに飽き足らず新しい思想を求めて一步を踏み出す姿を描いている。引用部分は素裳の誕生祝いのパーティの場面だが、上海の豊かなインテリ青年の間でコロンタイが流行の話題になっていたことがうかがわれる。

コロンタイの恋愛論は「水一杯論」と矮小化されたが、中国においても〈一杯水主義〉という言葉は、性欲の満足のみを求める刹那的な男女の関係をあらわすものとして広まった。「恋愛か革命か」は、1920年代末の中国文学における流行のテーマとなったが、共産党に対する弾圧の強化、日本の東北侵略など政治情勢の緊迫化にともなって、文学界における重点も変化してゆく。雑誌《紅黒》は8期で終わり、《新女性》も1929年12月を最後に廃刊になる。『M市へ』を書いた胡也頻は共産党の地下活動にかかわって国民党政権に逮捕され、1931年に銃殺された。妻の丁玲は生まれたばかりの息子とともに残され、胡也頻の志をついで左翼作家連盟の活動にかかわってゆく。

コロンタイの翻訳者の一人であった沈端先（夏衍）は、1930年に「『恋愛の道』『ワシリッサ』その他」という、中国におけるコロンタイブームの総括というべき文章を書いている。ここで夏衍はコロンタイの著作を紹介したのちに、レーニンの言葉を引いて、『三代の恋』の時代は過去のものになったと断定している。

ソ連においては、これらの問題は、法律、芸術、教育の面での努力の結果、すでに正しい解決を得ている。したがって、中国において、再びこのような「一杯の水」の「理論」（？）が登場しないことを望む。<sup>28)</sup>

実際には、ソ連社会は夏衍が夢見たように完全なものではなく、女性解放についても多くの問題を残したままだった。コロンタイが試みた性に関する女性の側からの問題提起は、日本においても中国においても、十分な論議をされることなく積み残され、市場経済が繁栄する社会での「性の解放（開放?）」の中に埋もれていった。



## V おわりに

中国におけるコロンタイ紹介は、日本語に翻訳されたものが間髪をおかず中国語に翻訳される形で行われた。ここから見て取れるのは、1930年前後の中国と日本の文化的な近さである。とりわけ東京と上海というアジア屈指の大都市では、出版業やマスコミを含む資本主義経済の発展がめざましく、両都市を結ぶ人と物の流れも活発だった。高い教育を身につけた知識青年が層として登場し、その一部がマルクス主義やアナーキズムなど社会主義の思想と運動の担い手となったという点でも共通していた。コロンタイ紹介の素早さは、同じ情報が同じ関心で共有されていた1930年前後の日中の関係の近さを如実に示す好例といえる。日本の中国侵略が明瞭な形をとり始めるまでの、1920年代半ばから1930年代初頭は、近代において日中両国の文化的・思想的距離が最も近い時期であった。

また、コロンタイの翻訳に、夏衍、楊騷、周揚など、よく知られた作家が携わっているのも興味深い。先にひいた夏衍の自伝にあるように、才能はあっても創作によって食べていくのは難しい若い作家にとって、翻訳は確実な収入を得られる副業であった。それはまた、当時の中国における出版が、産業として十分成り立っていたことを裏付けている。

中国におけるコロンタイの翻訳紹介は、日本と同じくその後はほとんど途絶えてしまう。ただ、性的無節操をあらわす〈一杯水〉という言葉はかなり広範に流布されたようで、日本占領下で出された雑誌の中にも登場する<sup>29)</sup>。インターネットで見た文章の中には、革命根拠地の延安でも青年の間に〈一杯水〉的恋愛が流行したという記述があったが、これについては確認できていない。これらの時期については、さらに調べてみたいのだが、具体的な手がかりがみつけないので、関連情報をお持ちの方があればご教示いただきたい。

## 注

- 1) 秋山洋子『『赤い恋』の衝撃——コロンタイの受容と誤解』『〈大衆〉の登場——ヒーローと読者の20～30年代 文学史を読みかえる②』インパクト出版会, 1998年, pp. 98-116。  
また、このテーマに関する詳細な研究として、杉山秀子『コロンタイと日本』新樹社, 2001年がある。
- 2) 作品のタイトル表記については、日本語・中国語・ロシア語からの翻訳が混在するので、すべて日本の常用漢字体とし、別表のみ発表当時の字体を用いる。日本語の書籍、論文名は『 』「 」を、中国語の書籍、論文名は《 》〈 〉を用いて区別する。小説のタイトルは長編・短編の区別なく『 』《 》を用いる。
- 3) Alexandra Kollontay, *Red Love*, Seven Arts Publishing Co., N.Y. 1927.
- 4) 『朝日新聞』1928年4月19日。
- 5) 「昔恋しい銀座の柳～」で始まる西条八十作詞・中山晋平作曲の「東京行進曲」（溝口健二監督の同名の映画主題歌）は1929年に作られ流行した。その4番には「長い髪してマルクスボーイ、今日も抱える『赤い恋』」という一節があったが、発表時に政治的な配慮で変えられたというエピソードはよく知られている。
- 6) 神近市子「新しき恋愛の理論について——コロンタイの「赤い恋」を読む」『女性』1928年3月号。
- 7) 平林たい子「コロンタイ女史の『赤い恋』について」『文芸戦線』1928年1月号。
- 8) 千葉亀雄「恋愛の拡大化と微小化——コロンタイの恋愛観とエレンケイの恋愛観の比較批判」『婦人公論』1928年10月号。
- 9) 細田民樹「読後『赤い恋』」『都新聞』1928年1月27日/28日。
- 10) 注6に同じ。
- 11) 『恋愛の道』は1930年『三代の恋』と改題されている。
- 12) このヒロインの名はロシア語の発音ではジェーニアだが、林房雄訳では「ゲニア」とされ、当時の日本ではその呼び方で流通した。中国語訳の「蓋尼亞」もその音を踏襲しているので、ここでは便宜上ゲニアを用いる。
- 13) 『女人芸術』は、長谷川時雨が主宰して、1928年7月から1932年6月まで発行された月刊誌。女性の文芸雑誌として出発したが、社会問題、女性解放理論なども広く扱った。
- 14) 1928年6月18日に開かれた合評会には、神近市子、平林たい子、深尾須磨子、新妻伊都子、林芙美子、金子しげり、市川房枝、山田わか子、野上弥生子、今井邦子、吉

- 屋信子、生田花世と、当時の論壇で活躍していた女性が網羅され、近頃珍しい真剣な会だったと報告されている。これをみても、コロンタイに対する関心の強さがうかがわれる。報告者は「無名指子」となっている。『女人芸術』創刊号、1927年7月)
- 15) 『恋愛と新道徳』収録論文は次の通り (カッコ内はロシア語原題の直訳と発表年)  
新しい婦人 (1913年) 林房雄訳 (ドイツ語からの重訳)  
性関係と階級闘争 (性道徳と社会闘争, 1911年) 川口浩訳 (ドイツ語からの重訳)  
恋愛と新道徳 (新しいモラルと労働者階級, 1918年) 林房雄訳 (ドイツ語からの重訳)  
有翼のキューピットに道をあたへよ (翼のあるエロスを解放せよ, 1923年) 廣尾猛訳 (ロシア語からの訳)  
共産主義と家族 (1920年) 林房雄訳 (英語からの重訳)
- 16) 山川菊栄「アレクサンドラ・コロンタイ女史」『女性』1924年10月号。
- 17) 「コロンタイの誤謬」『山川菊栄集 第五巻』岩波書店、1982年。
- 18) レーニン、ツェトキン著、水野政次訳『婦人問題叢書第1巻 婦人に与ふ：レーニンは労働婦人になんと呼びかけたか』共生閣、1927年。(手にいりやすいものでは、H・ポリット編、土屋保男訳『婦人論』大月書店国民文庫、1954年に収録されている)。
- 19) 《新女性》のページは、各期 (年間) で通し番号になっている。
- 20) 前山加奈子「女性定期刊行物全体からみた婦女雑誌」、村田雄二郎編『『婦女雑誌』からみる近代中国女性』研文出版、2005年。同「婦女問題研究会と『現代婦女』(『時事新報』副刊) ——中国の1920年代初期における「節育」観」『駿河台大学論叢』32号、2006年。
- 21) 1. 論性愛與其將來の轉變 劍波／2. 關於『三代的戀愛』的分析觀察 姚方仁／3. 讀了『三代的戀愛』『新戀愛道』和『排官僚的戀愛觀』三文 文宙／4. 戀愛的現在與將來 朱梅／5. 讀『三代的戀愛』後之感想 章克標／6. 『自由性交』與『戀愛遊戲』洪鈞／7. 戀愛至上感的抹殺 靜遠／8. 用相對性原理應新女性九月號裏所徵求的關於新戀愛問題的解答 安之／9. 我們將有自己的三代的戀愛 伏園／10. 三代的戀愛的二人的談話 孫福熙／11. 個性本位的戀愛 陳醉雲／12. 讀『新戀愛道』後 毛尹若／13. 新戀愛問題 弋靈／14. 讀三代的戀愛後 波弟／15. 新戀愛問題的我見 龍實秀／16. 對於新戀愛問題的解答 蒲察
- 22) 嵯峨隆／坂井洋史／玉川信明編訳『中国アナキズム運動の回想』総和社、1992年の第5章に、蔣俊「盧劍波のアナキズム活動」をはじめ、1920年代後半のアナーキストの活動が回顧されている。
- 23) 吳覺農については、前山加奈子「Y. D. とは誰か——日本の女性問題を紹介・論評

した呉覺農について」『中国女性史研究』第17号，2008年。

- 24) 夏衍（阿部幸夫訳）『上海に燃ゆ 夏衍自伝』東方書店，1989年，pp. 19－20（原書は《懶尋旧夢録》三聯書店，1985）。
- 25) 前山加奈子，注19に同じ。
- 26) 翻訳は，〈新婦人〉および〈家族問題〉が沈端先訳，〈戀愛與新道德〉〈両性關係與社會變革〉〈給有翼的邱比特一條路罷！〉が汪馥泉訳。
- 27) 《到M城去（M市へ）》は，《到莫斯科去（モスクワへ）》というタイトルで出版された。《紅黒》に掲載されたのは，小説の最初の3章にあたる。引用は，《胡也頻選集》pp. 4－6（開明書店，1951年）によった。原文では会話の部分が改行になっているが，引用では行数を省略するため地の文と続けた。
- 28) 馮乃超編《文藝講座 第一冊》神州國光社，1930年所収。夏衍の文章については，下記の中国社会科学院，李金〈柯伦泰和苏联的性文学〉，2005. 5. 26，に教示された。北京市哲学社会科学规划办公室信息中心制作《北京社户门户网站》  
<<http://www.bjpopss.gov.cn/bjpssweb/n3103c48.aspx>>
- 29) 例えば，楊鞭〈遊擊戀愛一杯水戀愛与自由戀愛〉《上海婦女》1928年3期，p. 11。